高知大学医学部および附属病院における百日咳集団発生事例

高知大学医学部附属病院
〇有瀬 和美　武内 世生　前田 明彦　瀬尾 宏美
脇口 宏　倉本 秋

高知大学医学部では他大学の百日咳集団発生を受け、百日咳の「水際阻止」対策を講じていた。平成19年７月18日に百日咳抗体価高値の医学部学生がいることが判明し、７月19日に全学生対象にアンケート調査を実施し、授業を中止してＰＣＲ検査を実施した。同日夜、146サンプル中急ぎ検査した28名中24名が陽性であることが判明し、医学部の休講を決定した。感染経路遮断を目的に対策を徹底し、７月27日に第１回現状調査、８月１日に第２回現状調査を行い、８月２日から国立感染症研究所（ＦＥＴＰ）との合同調査を開始した。

１．調査結果

ＰＣＲ(ポリメラーゼ連鎖反応)検査では、学生は162人中74人(45.7％)、職員は212人中148人(69.8％)が陽性であった。しかし、陽性者の約60％は無症状であった。また、98検体（ＰＣＲ陽性63名陰性35名）に対して培養検査を試みたが、菌は１例も分離できなかった。

積極的疫学調査の結果、市中感染を反映する散発例は４月以前から発生し、５月に集団発生の第一のピークを迎えていたことが明らかになった。最終的に学生81人、職員111人が百日咳または疑いと診断された。入院患者、退院患者は全期間通して症例定義に合致する症例発生はなく、外来患者についてはカルテ調査から数例が百日咳と疑われたが高知大学医学部との関連性はなかった。

２．感染対策

学生は休講・自宅待機とし、職員の有症者には就業制限を行った。また、学生・職員ともにクラリスロマイシンの予防内服を勧めた。全職員にはメールでマスク着用と手洗いの徹底、ミーティングの自粛を依頼した。職員の対患者へのマスク着用率が高かったことが職員から入院患者への感染伝播防止に有効であったと考えられた。

３．終　　息

学生については、休講および予防内服後は新規発症者を認めなかった。職員については、少数の新規発症者を認めたが、予防内服に加え、就業制限などを強化した結果、終息に向かうことができた。

最終発症者から最長潜伏期間の２倍の期間（42日間）監視を行い、新たな発症者はなく９月23日に終息と判断した。

４．考　　察

集団発生が起きた要因は、①地域流行の持込、②感染症発生探知の遅れ、③発症者の行動、④比較的長時間狭い空間を共有する講義室や職場の環境、⑤乳幼児期のワクチン効果の限界などが考えられた。そして終息を迎えられたのは、休講、有症職員の就業制限、抗菌薬予防内服、何より学生、職員の感染予防対策への積極的な協力が大きな要因だと考えている。

今後、標準的検査の研究や成人を対象としたワクチン接種に関する研究に切に期待したい。

〔平成20年８月23日　第６回日本医療マネジメント学会高知地方会（高知）にて発表〕